

令和7年度 大学生の力を活用した集落復興支援事業
実証活動報告書

会津大学短期大学部プロダクトデザインゼミ
×

福島県いわき市遠野町地域づくり振興協議会

公立大学法人 会津大学短期大学部 産業情報学科

2026年（令和8）年2月

目次

1. はじめに
2. いわき市遠野町の概要
3. 遠野和紙の取り組み
4. 令和7年度の実地調査・活動記録
11/15-16 遠野和紙の技法学習および作品発表会
12/20-21 遠野和紙の製作実習および課題整理のための懇談会
1/24-25 アクアマリンふくしまでの展示・販売活動
5. 活動により得られた知見と課題
6. 具体的なデザイン・運営提案
7. 今後の展望
8. おわりに

1. はじめに

会津大学短期大学部プロダクトデザインゼミは、1年生4名、2年生4名で構成され、デザインを通じた地域活性化を目的として活動している。具体的には、令和元年度より、会津若松市大戸地区における竹材の荒廃問題に着目し、地域と連携しながら対策に取り組んでいる。また、地域の要望に応える形で、こども園の依頼を受け、子育て支援スペースで使用する木製玩具のデザインおよび制作を実施した。

令和5年度、いわき市元遠野支所の若松直哉氏より、遠野和紙を用いたあかり制作に関する相談を受けた。3月中旬には、遠野和紙・楮保存会を訪問し、関係者から和紙の活用に関する課題をヒアリングした。その結果、デザインの視点から新たな和紙の活用方法を模索し、遠野町の地域活性化に寄与することを目的として本事業を開始した。令和7年度は、昨年度に引き続きいわき市遠野町の伝統産業である「遠野和紙」の活用および持続可能な継承に向けた支援事業を実施した。本報告書は、今年度の実地調査、地域住民との意見交換、および具体的な製品提案のプロセスをまとめたものである。

2. いわき市遠野町の概要

いわき市遠野町は、市の南西部に位置し、阿武隈高地南部の東斜面に広がっている（下図の赤い点で示す）。北は三和町、東は常磐藤原町、南は勿来町山田地区、西は田人町石住地区に囲まれている。標高は80m～200mで、平坦地は少なく、大部分が山林で占められている。町の気候は地域によって異なり、南部の上遠野地区は海岸低地とほぼ同じ気候であるのに対し、北部の入遠野地区は高原性の気候を呈している。豊かな自然環境に恵まれ、周囲には山間の緑地が広がり、鮫川や入遠野川などの清流が流れている。また、アユ・イワナ・ヤマメの溪流釣りが楽しめるほか、ゲンジボタルやカジカガエルなどの生息地としても知られている。



遠野町の位置

3. 遠野和紙の取り組み

遠野町地域づくり振興協議会では、地元の伝統産業である「遠野和紙」の継承に取り組んでいる。遠野和紙は約 400 年の歴史を持つが、洋紙の普及に伴い職人の数が減少し、2010 年には最後の職人が廃業した。その後、2022 年に住民有志による遠野和紙・楮保存会が設立され、伝統の継承に向けた活動が続けられているものの、スタッフの高齢化が大きな課題となっている。保存会の取り組みは、地域の誇りを次世代へと受け継ぐ目的として活動している。協議会では重点事業として継続的に支援してきたが、担い手の減少が進み、持続可能な継承に向けた新たな対策が求められている。

4. 令和 7 年度の実地調査・活動記録

令和 7 年度に実施した活動は以下のとおりである。

① 遠野和紙の技法学習および作品発表会（11 月 15 日-16 日）

地元素材を活かしたものづくりをテーマに、学生 4 名と教員 1 名の計 5 名がいわき市遠野町でのフィールドワークを実施した。本活動は、遠野和紙の技術体験および地域住民との意見交換を通じ、今後の共同制作に向けた基盤を構築することを目的とした。

■11 月 15 日：遠野和紙の講習と技法体験

午前には会津若松市を出発し、遠野和紙の製作拠点である「学び舎」へと移動した。同施設において、保存会関係者による遠野和紙の歴史（約 400 年の伝統）や具体的な製造工程に関する講習を受けた。講習後の実技体験では、実際の紙漉き（かみすき）工程に従事し、和紙特有の素材の繊維感や、乾燥プロセスに伴う質感の変化を直接的に学習した。学生らは、これらの素材特性を自身の作品制作へどのように応用すべきか、職人の視点を交えて積極的に吸収した。



講習会の様子



紙漉き体験中の様子

■11月16日：作品発表および量産・販売に向けた協議

上遠野町公民館において、学生が事前にデザイン・制作した作品の発表会を実施した。遠野和紙・楮保存会のメンバーに対し、デザインコンセプトや試作品の提示を行い、プロの視点から素材の適切な扱い方や製品改良に向けた具体的な助言を得た。続いて行われた実務ミーティングでは、実際の製品化を見据えた量産手法の検討や、地域イベントにおける展示・販売会の実施に向けた具体的な進め方について協議した。協議の結果、学生側と地域側（保存会）の役割分担および今後の活動スケジュールのイメージを共有し、本格的な活動展開に向けた前向きな合意形成がなされた。

本フィールドワークを通じて、地域資源としての遠野和紙に深く触れることは、学生にとって実践的なデザインプロセスを学ぶ貴重な刺激となった。

紙日和

手触りが伝える自然と伝統の美

紙日和は、日本の伝統的な和紙の美しさと、現代のライフスタイルをつなぐブランドです。和紙が主役の日常をイメージで、親しみやすく、雑貨全般にマッチすることを考慮してネーミングしました。古来の工法・原料で作られた遠野和紙の質感や繊細さ、温かみや耐久性を現代の生活に取り入れ、使うたびに心に安らぎをもたらす製品を提供します。



学生がデザイン・制作した和紙の作品



学生がデザイン・制作した和紙の作品（つづき）



作品発表会実施中の様子

② 遠野和紙の製作実習および課題整理のための懇談会（12月20日-21日）

12月20日から21日の二日間にわたり、学生7名と教員1名の計8名がいわき市遠野町を訪問し、伝統工芸と地域づくりの現場を直接学ぶフィールドワークを実施した。本活動は、伝統技術の実践的な習得と、地域の課題整理および将来に向けた可能性の模索を目的としたものである。

■12月20日：遠野和紙の製作実習

12月20日は、遠野町内の「学び舎」において、遠野和紙づくりに関する一連の作業に従事した。具体的には、和紙の原料となる楮（こうぞ）の伐採に始まり、楮はぎ、しょしとり（表皮を取る作業）、さらには紙漉きに至るまで、伝統的な和紙製作の根幹をなす工程を体験した。これらの実習を通じて、学生らは素材の特性や職人の手仕事に伴う労苦を肌で感じ、地域資源の有効活用における現場の重要性を深く学ぶ機会を得た。



しょしとりの様子

■12月21日：地域課題整理のための懇談会

12月21日は、入遠野公民館に場所を移し、保存会の現状把握と将来ビジョンの共有を目的としたデザイン思考ワークショップを実施した。ワークショップでは、保存会メンバー、地域関係者、大学教員および学生が立場を越えて対話を重ね、遠野和紙の現状や継続に向けた工夫について多角的な意見交換を行った。

話し合いの中で共有された現状として、楮の管理から紙漉きまでの全工程における人手

不足が深刻であり、特に作業時間や体力面での制約から、本来重要であるはずの紙漉き技術の習得に十分な時間を割けないといった実態が浮き彫りとなった。また、保存会の収益源が卒業証書販売や限定的なワークショップ等に限られており、活動の持続性を確保するための経済的な基盤強化が必要である点も再確認された。

「保存会の負担を増やさずに活動を継続する」という視点で行われたアイデア出しでは、近隣の婦人会へのグッズ制作委託による作業分担や、体験型プラットフォームの活用によるワークショップ運営の効率化など、無理のない循環を創出するための具体的な方策が提案された。本ワークショップを通じて、伝統工芸と地域づくりが直面する課題を整理するとともに、地域住民と学生が将来のビジョンを共有できたことは、今後の連携を深める上で極めて意義深い成果となった。



懇談会の様子

③ アクアマリンふくしまでの展示・販売活動（1月24日-25日）

地域連携型の実践的な学びの一環として、遠野和紙・楮保存会の全面的な協力のもと、いわき市のアクアマリンふくしまにおいて遠野和紙を活用した和紙プロダクトの展示・販売活動を実施した。本活動には教員1名および学生4名の計5名が参加し、これまでゼミで取り組んできた和紙製品の発信と、来場者との直接的な交流を通じた市場反応の検証を目的とした。

■1月24日：出店準備および会場設営

活動初日は、会津若松市よりいわき市のアクアマリンふくしまへ移動し、出店スペースの設営および作品の陳列準備に実施した。学生らは役割分担を行い、来場者に対する視認性や購買動線を考慮した展示方法を検討・実践し、翌日の販売開始に向けた最終確認を完了させた。

■1月25日：物品販売および市場調査の実施

活動2日目は、学生が企画・制作した和紙雑貨ブランド「紙日和（かみびより）」をはじめとする和紙グッズの販売を行った。販売活動を通じて、来場者に対し遠野和紙の歴史やその魅力を直接解説する機会を設けるとともに、消費者の嗜好や製品に対する客観的な意見を直接収集した。収集された反応や意見は、今後の製品改良や次なるデザイン展開における重要な基礎データとして位置づけられる。

本活動を通じて、学生らは製品の制作段階に留まらず、展示、接客販売、およびコミュニケーションに至る一連のデザインプロセスを実戦的に経験した。会津大学短期大学部プロダクトデザインゼミでは、今後も地域資源を活かした取り組みを継続し、学生の学びの深化と地域活性化の双方に寄与することを目指していく。



販売活動の様子

5. 活動により得られた知見と課題

一連の調査および懇談会を通じて、遠野和紙の継承における深刻な実態が浮き彫りとなった。楮（こうぞ）の管理から紙漉きに至る工程は非常に大きな労働負担を伴うものであり、保存会スタッフの高齢化や担い手不足により、作業時間や体力面での制約が活動継続の大きな障壁となっている。特に人手不足は深刻であり、日常の作業に追われることで肝心の紙漉き技術の練習に充てる時間が不足し、伝統技術を次世代へつなぐことが困難な状況にある。また、保存会の主な収入源は卒業証書用紙の受注販売、体験ワークショップ、および和紙グッズの販売の3点に限られており、収益全体が十分ではない点も、ボランティア募集などの活動資金を確保する上での課題として共有された。グッズ制作についても、現在は特定の個人に作業が集中しており、制作量や品質維持、そして活動の継続性の観点から限界が生じている。

6. 具体的なデザイン・運営提案

これらの知見を踏まえ、本ゼミでは「保存会の負担を増やさずに活動を継続する」という視点から、具体的なデザインおよび運営方法の改善を提案した。製品提案については、昨年度より展開している和紙雑貨ブランド「紙日和（かみびより）」のコンセプトを継承し、現代のライフスタイルに適応したプロダクトの開発を継続している。アクアマリンふくしまで実施したテスト販売では、学生が制作した和紙グッズが来場者から好評を得るとともに、接客を通じた直接的な対話により、製品改良や今後のデザイン展開に向けた具体的な意見を収集することができた。運営面での提案としては、制作工程の負荷分散を目的とし、近隣の婦人会等に和紙グッズの制作を委託して作業を分担する体制の構築を提示した。さらに、体験ワークショップの運営効率化を図るため、「じゃらん」等の体験型プラットフォームを活用し、予約管理や集客の負担を軽減しつつ、保存会の活動日に合わせた無理のない実施日設定を行う運営モデルを提案した。

7. 今後の展望

来年度以降の展望として、本年度の提案内容を実効的な仕組みへと移行させていく予定である。具体的には、婦人会をはじめとする外部団体との連携による制作体制の確立や、プラットフォームを活用したワークショップの試験的運営を通じ、保存会の負担軽減と収益性の向上を同時に目指す。これらの取り組みによって得られた収益を、楮畑の管理や農作業に従事するボランティアの募集費用、具体的にはお弁当の提供などに充当することで、活動が持続的に継続される循環モデルを構築することを確認した。

8. おわりに

本事業を通じて、伝統産業の継承には単なる技術の保存だけでなく、現代の社会構造に即した運営上の工夫や、デザインによる価値の再定義が不可欠であることを再認識した。特に、

保存会の方々と対話を重ねる中で、無理のない形で伝統を守り、それを現代の暮らしに取り入れるための具体的な方向性を見出せたことは大きな成果である。来年度以降も、地域住民とともに遠野和紙の魅力を発信し続け、本活動が遠野和紙の持続的な継承と地域活性化に寄与することを願い、会津大学短期大学部プロダクトデザインゼミとして引き続き取り組んでいく所存である。

2025 年度会津大学短期大学部産業情報学科デザイン情報コースプロダクトデザインゼミ
阿部愛音、石澤心愛、鈴木健太、今野真佳、岡澤由里絵、小松彩乃、豊野伶香、
渡部花穂

2 年代表	鈴木健太
指導教員	沈得正